開寶勅版の宋經大藏版に就いて

妻木直良

大藏經全部を雕造せる最初は、宋太祖の開寶四年に始まり、太宗の太平興國八年に至て成功し、その間十二年を費したことは、佛敎史上に有名なる事實である。『佛祖統記』第四十三卷開寶四年の條下に

勅高品張從信、往益州雕大藏經板、

とあり、又太平興國八年の條下に、

成都先奉太祖敕造大藏經板成進上、

とあるから、四川省の成都に於て雕造成功せることは明白である。但し元代に出來た『佛祖通載』には、之を開寶五年壬申の項下に係け、詔雕佛經一藏（註）計一十三萬板とあつて、板數迄も註入してあるけれども、その詳密なることは『統記』に比すべくもない、更に後に出來た『釋氏稽古略』にも宋太祖開寶四年敕彫佛經印一藏計十三萬板とあつて、始業の年は『統記』に從て居る。さて是の十二年間に成功した一大藏經の內容は、如何なるものであるか、一十三萬板とある丈では、更に之を測定する手掛りがないのであるが、旣に開元錄に於て五千四十八卷といふ定數を設け、之を千字文の字數に配當して函號とし、一函に約十卷を收

めて天字より群字に至る四百七十九字を得ることゝ定めてあるから、粗ぼ是の開元錄の順序に從つて其の儘に雕造したものであらうと推定せらるゝのである。斯く推定はせらるゝものゝ其の實物がせめて一卷でも是の世に現存して居たならば、如何に考古の資料ともなり、史傳の記事を確かむる指南となるであらうかと、かねてより識者の間に渴望せられて居た處である。

若しこの渴望が架空のものならば、我等に何等の刺戟を與ふるものではないが、我國の事情を調べ、古記を辿つて見ると、是の無二の珍籍が、是非に我が古刹の經藏に現存すべき十分の可能性を有つて居る。先づ是の開寶勅版の一切經が、我國に將來せられた歷史を見ると、『統記』には、早くも勅版成功の翌年、即ち雍熙元年に、奢然が宋に入て印本大藏經を求め、詔して之を給與すると見ゐる。されば奢然が雍熙三年の歸朝に際して、

大藏經五千卷を齎らし歸るとあるは、確にこの勅版藏經であつた。さて齎然の將來した此の勅版初印本ともいふべき一切經は、何れの寺へ安置したかといふと、京都の法成寺中に安置したといふことが、成尋の『參天台五臺山記』に見ゑて居る。勿論法成寺は現存しないから、その經の何れに散佚したかは不明であるが、何處にか零本が傳はつて然るべきである。又此の勅版刻成後、八十九年を經て成尋法師が入宋した。成尋法師は神宗よりの異數の寵遇を受け、當時の印經院にて多くの經論を買取ることを許可され、殆んど過半を印刷せしめたことが、その紀行たる上掲の『參天台五臺山記』に見ゑて居る。是の時代は、宋代に起つた第二回目の大藏版、即ち福州東禪寺版の彫造着手の紀年たる元豐三年を遡ること九年であるから、印成の經論といへば、開寶勅版より外にはない筈である。偖てかくの如く史傳を繙くと、此の勅版

藏經渡來の始末が明瞭であるが、是等の記載を外にしても、現に開寶勅版が存在した證據がある。先づ、鵜飼徹定師の『古經題跋』に據ると、大德寺の經藏に、華嚴經第一卷があつて、其の奥書に

大宋開寶九年丙子奉敕雕造太平興國八年奉敕印

とあると記し『稽古略』等を引て考證を加へてある。是は實見の記錄であらうが、大德寺の經藏は殆んど底の塵迄拂出す程に調べられたけれども更に出ない。然るに去る大正四年第一回大藏會の催された際に、面白い事實の證據が上つた、それは石山寺や法隆寺に現存する平安末期の寫經は、多く是の開寶勅版（當時に所謂唐本）に據て寫したといふ事實である。從て是等の寫經の奥には往々にして開寶彫造の年と及び之を印造した年とを記した文字を、そのまゝに寫し取つたものがある石山寺所藏の、大乘金剛髻珠菩薩經の奥に、

大宋開寶六年癸酉歲奉勅雕造　太平興國八年奉

勅印

久安六年正月十七日書寫了

とあるは其の一例である。是の書寫年代の奥書は『第一回大藏會目錄』六十六頁（二百八十八號）に記されて居るが、惜い事には、宋勅版の年號が省略されて居る。それから同年に法隆寺經藏調査の際に發見したのは、『法句經卷上』であつて、その奥にも、

大宋開寶九年丙子歲奉勅雕大平興國八年奉勅印

とある。是れで我國に存在したことは、愈々事實に證明せられた譯であるが、是とても恰かも死人の寫眞に對すると同じく、何となく物足らぬは何人も同感であらう。所が茲處に一つ稍や有望と思はるゝのは、南禪寺の經藏である。此の經藏は從來但だ麗版宋版の混成であると稱せられて居たのであるが、段々調べて見ると、宋版の中に東禪寺版もあり、開元寺版あり、思溪版あり、磧砂版もあり、元版の普寧寺版もあり、又高麗の舊版もあり新版もあるといふ風で、凡そ外來の漢譯大藏の標本が悉く是の藏中に發見せらるゝのであるされば若しや是經藏に開寶版の存在することもあらうかと佐賀、舟橋兩君の助力を乞うて、精探の歩を進めて見ると、第二回大藏會開催前に當つて、遂に寫眞に見るが如き『佛本行集經卷第十九』（令字號）一帖を掘出したのである。是出現に依て彼の石山寺寫經も法隆寺寫經も、その底本は同一の形式にて奥書せられた事、行數字數等總て一目瞭然の光を放つことゝなつた。是の本は初印ではなく、刻成後八十八年を經た熙寧四年の摺本であつて、福州東禪寺本一切藏雕造着手の元豐三年に先立つこと僅かに九年前の印造である。是版幹事者は張從信であるから、奥書の下に小字で孫清と記されるのは、他の宋版に照して刻手又は印成者の名であること疑ふべき餘地がない。茲に奥書全

文を掲ると左の如くである。

大宋開寶七年甲戌歲奉敕雕造　孫清

> 熙寧辛亥仲秋初十日　中書劄子奉
> 聖旨賜大藏經板於顯聖寺聖壽禪院印造
> 提轄管勾印經院事智悟大師賜紫　懷謹

是の印成年代は、甚だ雕造年代より後れて居るが其代りに非常なる興味を我々に賚らす一事實がある。それは印經提轄の懷謹法師といふのが、我が入宋者の成尋法師と知己の間柄であつて、而も是の顯聖寺印經院は成尋法師が印經を購求せんが爲めに數々視察に往つた寺である事である。成尋法師は熙寧五年宋都に入り、同六年に印經院の經を買取つたのであるが、懷謹法師の牒文（佛教全書刊本『參天台五臺山記』卷七一四五頁）に據ると熙寧四年八月十日の中書劄子に依て印造せるもの五千四百二十五卷とある。是で今の奥書の大藏板を顯聖寺に賜はつた日附と全然一致するのみならず、此時に雕造した一切經が新經を加て『開元錄』よりも增すこと三百七十七卷迄立至つた事實をも確かめられるのである。今左に懷謹の牒文を掲げて參考の料に供し、併せて此の一帖が成尋法師と甚深の關係あることを附加して置く。

廿四日（丁卯）雨下、顯聖寺文字送傳法院、顯聖寺印經院准傳法院劄子據日本國（乃至私略）合使錢數者

右謹具如前、本院勘會、今來所要新譯經五百餘卷、切緣所管經板萬數浩瀚、逐時印造、每一歲并新譯成經共五千四百二十五卷並係一依自來舊印經院條式內數目出賣、今來本院近准熙寧四年八月十日中書劄子撥賜、到上件經板赴院管勾後、雖依舊來卷數出賣、卽不見得是何經文係聖朝新譯、致目下未敢印造、謹具狀申傳法院、伏特賜指揮降下、逐部經名題目、下院貴憑點檢、印造有枉費官錢、謹錄狀上牒、件狀如前、謹牒、

熙寧六年三月　日提轄管勾印經院事智悟大師賜紫懷謹、